

生きる文脈の交錯する開発援助の現場から：「手ぶ らで渡り歩く」というアクション

内藤, 順子
日本女子大学

<https://doi.org/10.15017/2341058>

出版情報：九州人類学会報. 36, pp.5-13, 2009-07-12. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

生きる文脈の交錯する開発援助の現場から
——「手ぶらで渡り歩く」というアクション——

内藤 順子 (日本学術振興会特別研究員 (PD)、日本女子大学)

キーワード: 「複数の文脈を生きる」、「手ぶらで渡り歩く」、
「社会的承認」、資源、開発と人類学

I. はじめに

チリで暮らしていると、日常生活のなかで出会ったチリの人たちから「チリは好きか」とよく聞かれる。初対面で話題に困って聞く、というふうでもなく。タクシーの運転手だったり、店員やレジ係だったり、なかには仕事を通じて出会った人のこともあるが、たいていは偶然の短い出会いのなかでの質問なので、「好きです」と答えるようにしている。めずらしくスペイン語が通じる東洋人に、深い意味なく聞いているのだろうが、「好き」と答えることを期待されていることがわかる。そして、好きである理由をわたしが説明する前に「ほかの南米の国と違ってきれいで安全だからね」「ラテンでも秩序を重んじて几帳面だからね」「南北に長い国土にはすべての観光要素があるからね」「チリ人にはいい男が多いだろう」などと列挙される。

最近、所用で訪ねたサンチャゴにあるちいさな旅行社で、また同じ話の運びをする機会があったので「でもスラムもありますね」とひとこと発してみた。すると社員のひとりはいやスラムといっても“ミザリー”ではないんだ。飢餓に苦しんでいるわけではないし、チリはスラムといえども“きちんと”している」と言い始めた。ところが、わたしが観光客や1度きりの短期滞在者ではないとわかるとトーンが変わり、とくに、頻繁に出入りしている低所得者居住区の名前をいくつか挙げると、居合わせて話に群がっ

ていた数人の社員たち(定職のある中産階級)は「あのスラムはまた話が別だ」「あそこも特別だ」「彼らは無知だ、愚けものだ、チリの汚点だ、でも政府はあんな彼らのことも支援しているし自分も賛成しないわけじゃない」という話になった。このトーンの変化に見える「表現の層」は、発話者にとってそれぞれがどれも嘘ではないだろうし、かといってそう信じているというものでもないだろう。その真偽を検証する必要もないが、重層化した表現があることには注意が必要であろう。

ここでいう層とは表現についての比喩であるが、そのまま、経済的状況にもとづく現実の社会階級のありかたとも重なり合う。上層階級の言説やパワーが下層階級を覆い、これといった根拠のないうわべの表現が、一方的に下層の人びとの「負」で「悪」の性質や来歴を説明する。それは意図的に下層の人びとの「無言化」[アードナー 1987]を強いるわけでもなくあたりまえに行われており、その“ふつうさ”がかえってたちの悪い圧力となって、暴力性を帯びてしまうことがある。下層の人びとは地盤として広がっており、時折、褶曲を起こしては断層(fault)をつくり出す。そうした「あのスラムは話が別だ」といわれるような、見えてしまっている断層がいくつもあり、それらは政府や中産階級以上の人びとにとっては同じチリ国民でありながら、滑らかであるべき土地に出現した不足(fault)だらけの「内なる辺境(Fronteras

Interiores)」¹⁾として他者化したい存在である。しかし、一方で整合を目指して手を差し伸べるべき対象でもあるという、矛盾をはらんだいずれにしても気になる問題としてつねに傍らにある。

そのようなチリ国家内における貧困問題にたいして、国際開発援助は上層をとびこえて下層に直接的に刺激を与える断層運動のようでもある。わたしはその直接的なかかわりを担当する「要素(資源)」として、下層に位置づけられた人びととすぞすうちに、暴力的に見える何か——たとえば貧困者について欠損のことばによってしか表現できないことや、貧困を強固にする構造をつくりだしていること——が起こっていると感じた。そしてわたしは断層を眺め、地層を垂直に水平に縦横無尽に渡り歩いていた。本稿では、開発現場において人類学者として地層の各層や断層を「渡り歩く」というアクションをとおして考えられた可能性について試論したい。

II. 条件しだいの弱者

1 マルメロの実をめぐって

わたしは日本の政府系機関による医療開発プロジェクトに携わる派遣専門家としてチリに赴いており、その一環でいくつかの低所得者居住区で調査を続けていた。ある日、ある低所得者居住区(以下、B地区)で出されたメンブリージョ(Membrillo)と呼ばれるマルメロの実を食べたときのことだった。マルメロは一般的にはジャムや羊羹にするなどの加工をして食べるが、チリでは熟れたマルメロを生で食べるのもそうおかしなことではない。ただ、このときB地区で出されたものはまだ固く青かったのも事実で、また、もともと整腸作用があるせいか、食べた夜からわたしは激しい腹痛に見舞われて発熱し、しばらく寝込むほどのひ

どい食あたり状態となった。そんな衰弱しているわたしに、知人の栄養士(定職のある中産階級)がシナモンのお粥を届けてくれながら言ったことは、「B地区で出されるものなんかを口にしてはだめ。彼らは手も洗わないし、果物も洗わないし、彼らに免疫があってもあなたにはないのだから」ということだった。

しかし、この食あたりは「B地区の不衛生さ」によるものというよりは、まだ熟れきれていないマルメロであったことと、わたしの無知が大きな原因である。それでもこの件があって以降はB地区の家族も「Junkoは異文化育ちのデリケート(弱者)だから」といって特別にケアしてくれるようになり、マルメロが出るときには「あなたは食べちゃダメ」といわれ、食事のときには「よく手を洗ってらっしゃい」と注意されるようになった。手を洗う習慣がわたしよりも確かに少ない頻度の彼らからそう注意されることは、釈然としない思いでもあったが、理にかなっていた。育った環境が違うのだからケアのポイントも違って当たりまえだという区別である。彼らの暮らしのなかでは、わたしがマイノリティであり、免疫力と生存能力に欠ける開発すべき日本の箱入り娘だったのである。

2 「構造的弱者」

マルメロをきっかけにB地区で弱者認定を受けたわたしは、そのままの意味の弱者であって「構造的弱者」ではないので、せいぜい、日頃手を洗う習慣のない人たちから手を洗えと注意されて納得がいかない思いをするくらいである。しかし、彼らは手を洗うことが衛生上必要であることは知っているし、そう習慣づいていないせいで、だらしのないとか不衛生だと見なされることもまた経験的に知っている。中産階級以上の人びとのほとんどは、実際に低所得者居住区に足を踏み

入れることがない。それでも低所得者層の習慣の違いは無知によるものとしてとらえられ、過度にマイナスのイメージを付与され、強化・再生産されて容易に「差別」感覚をよぶようになる。先述の栄養士の発言もまたこのイメージを前提にした差別的感覚があらわれたものであるといえよう。人は誰でもがその育った環境しだいで得手不得手があり、それに応じた弱者になりうる。それにもかかわらず、こと貧困に限っては、貧困外部で主流の習慣と異なるような「暮らしぶりにもとづく癖」や「身体配慮の違い」が、「それゆえに貧しいのである」「貧しいゆえにそうである」というもっともらしい表現となり、差別や劣視傾向を阻むことなく構造化を引き起こし、「ラベリング」という事態や「無言化」をうむ。こうした事態に直面したわたしは、「癖や配慮の違いは、たんなる差異であること」を主張しはじめていた。そして必要以上の負のラベルをはがすこと、無言化の構造をつくりだす原因をさぐることを考え始めた。貧困という途方もない大問題を解消することなどは到底できそうにない。しかしそこに居合わせてしまった者として、何が間違っているのか、そして何ができるか考えることくらいはできる。とくに開発という、人類学者には少々生き／活きにくい現場²⁾でまず間違っていると感じたのは「ボトムアップ」の現状であった。

Ⅲ. ボトムアップというかかわりかた

「ボトムアップ」や「被開発者の視点にたって考える」という思想は開発においては必須の実施事項としてあげられる。日本の政府系国際援助機関の専門家研修ではボトムアップについてつぎのように説明する:「現場からの意見を取り入れること」「下の者の意見を取りまとめて上の者が判断すること」「被開発者の視点や意

見を取り入れ耳を傾けること」。間違ってもいないのだが、正しいとも言えない。こうした説明の流布の結果、現場で実際によく見られるのは、「ボトムアップのつもり」の実践である。たとえば住民の意見を取り入れようと彼らの住まいに赴き、いかに彼らの家屋が不足だけであるかを説明し、改善したいに違いないという決めつけにもとづいて家屋改善と資源導入の手続きをとる。だが、これはボトムアップではないばかりか、ボトムをボトムとして固定させるかもしれない。あなたの家屋にはドアがありませんね、天井に穴があって十分ではありませんね、床は土がむき出しで安全性と衛生さに欠けますね、といった欠損の指摘の羅列だからである。そもそもが「ボトム」の彼らであるから、ないないづくしの暮らしぶりこそ自然体であり、救わねばならない、という周知の事実と思ひこみが、欠損の言語で語ることを許容してしまう。そして、それが偏った価値観に則った思考であることに鈍感になってしまう。

本来の意味でのボトムアップとは、対象の知恵を借りて可能性を引き出すことであろう。そして、その知恵なるものがどこにあり、資源となりうるかどうかをともにさぐることであり、つまり、手もとの実感やそこに身を置いてわかることからしか成しえない。研修でいわれるような「被開発者の視点や意見を取り入れること」よりむしろ、「どのような視点で、どのような意見をどのように取り入れるのか、のプロセスを被開発者とともにすること」である。これは言い換えれば欠損言語でしか説明できずにきたものをそうしない努力といえよう。B地区もその他の低所得者居住区も、そこでの生活はスラムでないところと同じように豊かであり、同じようにどうしようもない。それを偏った定義で様ざまなことを見落としながらかかわり、介入すると、それ

はたちまち暴力となってしまう。

IV. 複数の文脈を生きること

1 チリのフォーク・アート：アルピジェラ (Arpillera)

では人類学は欠損の言語以外で貧困という対象を説明することができるのだろうか。それを考えるためにチリのスラムの女性が組織する、アルピジェラというチリ伝統のいわゆるパッチワークの民芸品作業所についてを事例として進めていきたい。

チリ軍政下の1973年から1985年、貧困地区では各世帯、家族の連帯が強固であった。福祉政策の見直しから保護給付金は減額し、失業率が高まり、男の仕事がなくなり、稼ぎの手立てがなくなった。女が家庭を守るしかなくなるなか、彼女らは共同鍋や作業所を組織し始める。それはサンチャゴのスラムの方々でつくられ、ときに作業所同士が連携しながらそこは反軍政運動拠点になることもあり、一定の機能を果たしつつ1990年代半ばまで存続した。アルピジェラはいまやチリの代表的な刺繍の民芸品としてその地位を築いているが、始まりは明るい話ではない。軍政下で行方不明になった人間を捜している人が、あるいは拷問で死亡した家族を持つ者が、政府を非難する手だてとして、行方不明・死亡者の衣類の端切れや手に入る素材を寄せ集めて作り始めたものである。窮屈な生活で資源がない時は毛髪を使ったりもした。刺繍の画には、チリのどこにいても見えるアンデス山脈と、女性の労働姿が必ず描かれる。軍政時には傷めつけられて吐血する人びとや、警官隊による虐殺風景も数多くあった。その制作にあたって捕まって拷問をうけた女性もいた。この独裁によって推定5000人の行方不明者が出て、亡命を余儀なくされた人びとや拷問によっ

て命を落とした人びとがいる。そのトラウマをかかえて精神的治療が必要とされる人びとは、まだ約8万人いると言われている。こうした経緯で生まれたアルピジェラは、軍政が終わったあとには、もともとの反政府表明ツールという性格から、歴史や痛みと悼みの記憶のための作品として作られ続け、やがて装飾品となっていった。それが、今世紀に入って「手造り3Dアート」としてインターネットデビューしたのである。フェア・トレードのひとつとしてネット空間に出たのだが、この作業所の様子を知るわたしにとって、また、わたしのようなものも参加して手縫いした作品が「3Dアート」と命名されることが気恥かしくて仕方がない。パッチワークで綿を詰めるので3Dというのも嘘ではないのだが、名前からシャープなものを想像されるとおそらくイメージがかなり異なるだろう。

2 複数の文脈を生きる

いずれにしてもアルピジェラが国境をこえた空間へ飛び出たのは事実であり、その購入客はフェア・トレードに賛同する人びとを中心とした世界各地の人間である。アルピジェラはアンデス文化の伝統的民芸品として、エコ素材をもちいて作られた3Dアートと説明され、「作り手の貧困下にある女性支援」を前面にして売り出されている。つまり、「貧困」「女性」という「複合差別」³⁾ [上野 2002] に苦しむ女性を助けようというものであり、3Dアートは貧困から脱却する手だてのひとつとして、あるいは戦略として位置づけられている。しかし、ここで注目すべきは作業所の女性たちが「複合差別」下にあるかどうかとか、その実態分析ではない。複合差別下にあると述べたところで、追いつめられたりその表象によってプラスではない自己認識をすることはあっても、彼女らにとって何かひら

かれることがあるとは思えないのだ。それよりもむしろ、複数の文脈を生きることが重要であると考えている。ネット空間のことだけを考えると、購入者と作業所の女性たちのあいだに優劣はなく、たんなる購入者と販売者という関係性しかない。「複合差別下にある女性が作者です」と銘打っていることは、たとえ購買意欲を高める可能性を求めてのことであっても、適正価格という意味でのフェアは確保できるかもしれないが、社会的地位という意味でのアンフェアを保障してしまうのではなかろうか。作業所の女性たちは、アルピジェラが売れば購入者がどう思おうと関係ない。購入者も実際には手にしたアルピジェラに満足できればそれでいいはずだ。その生きる環境の異なる人びとのネット空間での出会いに差別問題を忍び込ませること＝購入者が優位にあり、販売者が劣位にあるということは留まって考え直さなければならぬであろう。現状では、経済的格差＝社会的地位のみならず人としての尊厳にも抵触するような優劣や差別をみるのが、社会的に承認されている。こうした差別を成り立たせる文脈がそこにあることこそが問題なのである。それが同時に暴力となるからだ。少なくとも低所得者居住区では「差別を成り立たせる文脈に侵入をうけている状態」にあるとっていいだろう。つまり、差別を成り立たせるのは文脈なのだ。ではそれはいったいどのような文脈であろうか。

3 「社会的承認」という暴力

ここで卑近な例を出して考えたい。わたしがこのチリの現場で文脈に敏感になったのは自分自身の体験があったからである。当時のわたしは少なからず複数の文脈に生きており、チリで医療開発プロジェクトに携わっていたこの時に、人生においてもっとも差別を受けていると感

じていた。「女」「専門家規定年齢より若い」「大学院生」「学位(博士号)がない」「医療従事者ではない」という属性によって、会議やセレモニーや夕食会や懇親会などのあらゆる場面での座る位置や、移動手段の等級やその他の諸待遇、日常的な連絡がこないなどの末端待遇を受けた。これはいう人が言えば立派な「複合差別」とされるであろうが、それはかえってつらくなる定義だということを実感する。しかし、プロジェクトにおいてはマイナス要素でしかなかったこれらの属性も、文脈によってはすべてがマイナスになると限らない。たとえばそれがクラブ(接待飲食店)であったらどうだろうか。「女」「若い」はもちろん、なにかの専門に詳しくれば気のきいた会話ができるかもしれない可能性のある「大学院生」という要素などはプラスになるであろう。そうだとすれば、ある社会なり集団には差別を成り立たせるだけの、共有される価値観と身についたものがあることになる。わたしは医療プロジェクトのなかではその集団のもつ価値観からははずれており、承認が受けられなかったのだ。社会的承認というのは、ある秩序を保つのに必要であるいっぽうで、このような暴力性に富んだ追い込みかたをするものともなる。低所得者は、承認するものでも、承認されるものでもなく、承認されない排斥項なのである。であれば、この承認を必要としないかかわりの場を考えることが必要となってくる。

V. 人類学的アクションの可能性：手ぶらで渡り歩く

開発援助の現場に身を置くうちに、しだいにその現場の専門家になっていく人類学者にとって、「開発分野」は馴染みやすいものではない。その他の援助にかかわる人びとはたいてい専門をもっていて、

遂行任務も決まっている。それゆえ常に「成果」が求められ、報告が行われている。ところが、わたしはといえば語学力以外はこれといった専門技術もなく、丸腰の手ぶらで暗中模索の暮らしをするほかないのだから、決められた援助期間のうちの際立った「成果」をだせる確証などあるはずもない。その点だけでも人類学者は、開発に携わる他の実務者や「至上の技術」を手にする専門家とのあいだに距離を感じる人が多い。開発現場の人類学者にとって「成果を出す」とはどういうことを言うのか、そもそも開発援助の「成果」とは何を指すのかから考え出すのだから、開発プロジェクト実施サイドからすれば始末が悪いだろう。しかし、わたしの諸々の主張の根本はここにある。開発者側が成果だと考えていることは、開発者の文脈と前提から考えられる成果である。生きる文脈も、日頃身を置く環境も異なる人びとが会する現場であるから、いる人の数だけの前提や考えられる成果があってもいい。そうした多種多様さを互いに認め合う協働こそが必要であり、とくに下位に位置づけられる被開発者の描く成果も、開発者側が考える成果もひとしく並べてどれかを選択するか、新たな方向を見出すかしてプロジェクトが進められればそれが理想的であろう。

開発援助というのはその国で、その時代のその時間に、その一度限りの現場に居合わせた「代替不可能」な個人関係に左右されるといっても過言ではない。人類学者は手ぶらであればそれぞれの専門家がもつ背景と文脈をとらえつつ、すべてのアクターについての事情を把握して翻訳することも可能であろう。いっぽうで、そうした「つなぐ」努力などのアクションとは別に、開発現場において「人類学者という存在そのものが効果・資源である可能性」もあると思われる。

たとえばわたしが、低所得者居住区のとある扉のない家に扉をつける現場に居合わせたなら、その家流の扉がどういうものでありうるかと模索すること、「よそよそしいものを飼いならして生活空間に馴染ませる」⁴⁾ ようにする、その支援を行うであろう。それで扉が暮らしに馴染み、その家流のものになったとき、そんなものは扉の役割とは言えないとか、扉というものの定義からかけ離れているという批判があっても気にならないであろう。ある程度の定義の参照は必要かもしれないが、無理に従う必要もない。それで呼び名が“扉「的」なもの”といわれようとも、その住人が満足であれば、呼称や定義は問題ではない。異文化に相対するとき「(開発者にとって) 至上とされる技術や資源を土地にあてはめる思考」と、「その土地の文脈における至上や資源とは何か(その技術を土地においてどうしたら至上となりうるか)を思考すること」という違いがここにあるとしたら、これはどちらかが正しいのではなく、どちらもうまくバランスよく存在していれば良い。丸腰の手ぶらでフィールドを渡り歩くと、多くのことが気になり、たくさんのが気がなくなくなる。そういう役割の人間が開発現場にいるということが必要なかもしれない。もちろん人類学者自身は理不尽な開発の暴力を目の当たりにして怒りを覚えたり、あれこれ発見したり悩んだりしてアクションをするのだが、たとえばマルメロでお腹をこわしたりする存在として開発援助の場にいるということが、被開発者から引き出すものがあるということ、一般的な開発者からすればその身を犠牲にするかのような「奇異なやりかた」で開発にかかわる人類学者は目障りながらも存在を主張するであろう。いや、目障りさという効果を与えることになるだろう。

VI. おわりに

開発の現場で人類学者が生き／活きにくいもうひとつの理由は、開発者の多くが（ときにうっかり人類学者もこのひとりとなってしまったりもするが）自分が生きる世界で共有される「社会的承認」を背負ったまま現地に赴き、開発者と被開発者の関係性は優劣とすりかえられ、開発者の文脈が被開発者の文脈に侵入するのがあたりまえの環境となってしまう点である。そこに住まう被開発者の文脈への配慮を怠り、無視し、無視しても優位文化を移植すべき開発現場ではなんの問題でもないことに納得ができないからである。しかし、こうした納得のいかなさを、論理的にかつ暴力的に社会的承認をまとったまま現地入りする開発者にたいして説得できるような方法をいまだ人類学が持っているとは言えない。その意味では、こうした暴力を容認することはないとはいえ、排除できずに、本稿の冒頭にもひいたような表現の層を支える一端にわれわれ研究者も居ることに自覚的にならなければいけない。であればこそ丸腰の手ぶらのアクションによって文脈からの自由を心掛けたい。

最後に、ふと訪れた、ある文脈から自由になった出会いの場面に、希望を託したい。

高級住宅地の一角にあるスーパーマーケットでわたしは真剣にアイスクリームを選んでいた。ケーキ状にアイスが織りなされた魅力的な商品が約二百円。外箱の写真がじつにそそる。それを買ってカゴに入れたとき、「ねえってば。」と肩を叩かれた。見知らぬ親子連れの母親だ。アイスに夢中で気づかなかったが、少し前からいたようだ。すると「小銭を頂戴。子どもにアイスを買ってあげたいの」という。そうした要求すべてに応えるときりがないので一度は断ったものの、子ど

もの目がわたしのアイスの外箱に釘付けになっている。さすがにきまりが悪い。ポケットにあった小銭を渡してその場を離れた。しばらくしてスーパーをでたところの横断歩道に先ほどの親子がおり、子どもがアイスを食べていたので少しほっとしたが、母親は別の信号待ちの男性に小銭を要求していた。わたしに気づいた彼女は近寄ってくるや否や「今夜食べるものもないの」といいかけたが、わたしは発言を無視して、単純な興味から「どこから来ているの？」と尋ねた。階層によってある程度居住地域のはっきりしているサンチャゴでは、彼らが高級住宅地まで徒歩で、しかも子連れで来ることは容易ではない。だとすればバス代がかかるからだ。母親は面食らったような顔をしたあとに、不意の質問に素直に答えてくれたので、信号が変わるまでの少しのあいだ、世間話をした。すると子どもが「あなたは韓国人？中国人？」と聞いてきたので、日本人だというと、母親がうれしそうに「はじめて話した日本人よ！」と興奮気味に。「チリには日本人があまりいないからね」といって簡単なあいさつをしたあとわたしが信号をわたっていくと、背後から「ねえほんとにありがとう、話せて嬉しかった」と大声で母親に叫ばれて照れくさくなり、しかし、わたしも嬉しかった。

たんなる他人同士の出会いをしたふたりは、経済的区分による上下で境界づけられた枠の中で、「乞う／施す」という目的達成のために、およそ人間同士の出会いらしくないやり取りをする文脈におかれている。それが、不意の問いによって文脈が変わり、ふたりの人間同士の交流になったと言い換えてもいいだろう。彼女とわたしのあいだに固有のものとして生まれた関係性だ。つまり、貧困者とそうでない者の出会いは、「通常」の文脈では関係性が固定化され、ふたりはその文

脈に従う。その文脈はふたりの間に境界を設け、それに伴う行動すらも規定してかかっている。しかし、まだチリの「通常」の文脈や境界に馴染んでいなかったわたしの不意の問いによって、文脈が移動し、境界が揺らぎ、文脈にしばられていない状態になったために、それぞれの「個」が顔を出したのである。このような文脈にとらわれない生と出会いを紡いでいるローカルのことを、「上のないローカル」というぎこちないことばでとらえながら、境界のはりめぐらされた世の中から少し自由になる術を考えている。

謝辞

本稿のもととなる調査は 2007 年度－2009 年度科学研究費（特別研究員奨励費・研究代表：内藤順子）および 2007 年度－2010 年度科学研究費（基盤研究（A）海外学術・研究代表：関根康正）により可能となった。

また本稿は 2008 年 10 月 25 日開催の九州人類学研究会（日本文化人類学会九州・沖縄地区懇談会）第 7 回オータム・セミナーにおけるセッション：「アクションを待つフィールド」（代表：飯嶋秀治・九州大学）での口頭発表「生きる文脈の交錯する開発援助の現場から」をもととし、セッションメンバーである飯嶋秀治氏、亀井信孝氏、辰己佳寿子氏、山室敦嗣氏との議論の積み重ねにより加筆修正したものであり、それぞれのフィールドへむかう姿勢に励まされる中で思考されたことの途中経過である。こうした機会を与えてくださったメンバー各位、ならびに九州人類学研究会関係各位に記して感謝したい。

註

1) チリにおいては、社会的現実として空間的にも接触可能な貧困者をいかに減らしていくかが課題であり、貧困を他者化したい

その他の階級の、社会防衛の観点から問題化されている。貧困地区では出生届や居住場所などを把握できない状況が多い。そうした貧困地区のことを、軍隊が軍政時代に使っていた表現を引き継いで「内なる辺境 (Fronteras Interiores)」という。

- 2) 本稿 V 章および [内藤 2008] を参照。
- 3) 上野千鶴子の概念化した用語である。上野は、同時に複数の文脈を生きる個人が経験する“差別”に関わる経験を、複数の差別が単に蓄積した状態であると捉えるのではなく、互いに絡み合ったり錯綜したりしている状態と捉え、そうした状態を表すものとして、複合差別という用語の概念化を試みた。
- 4) 関根康正はローカルに根ざしたグローバルなもの展開について、影響関係がありながらも必ずしも倣うばかりではないそのあり方を「下からのパッケージ化」と呼ぶ。それは「自分にとってよそよそしいものを親密なものに飼いならし招き寄せることで生きられる生活空間を構築すること」であるという。こうしたよそよそしいもの（ここでは扉）を、チリの低所得者居住区のウィズダムが集積する生活空間に馴染ませて構築し直すことが必要であろう。

参考文献

アードナー、エドゥイン

1987『男が文化で、女が自然か？』山崎カヲル監訳、晶文社。

上野 千鶴子

2002『差異の政治学』岩波書店。

関根 康正

1995『ケガレの人類学——南インド・ハリジャンの生活世界』

2007『「資本としての知識」から『資源としての知識』への視点の移行がもたらすもの』『資源人類学 03 知識資源の陰と陽』C.ダニエルス編、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、弘文堂、219-248。

内藤 順子

アクションを待つフィールド (飯嶋・内藤・亀井・辰己・山室)

2008 「<下からの>人類学的研究——チリ
における地域リハビリテーションの
実践から」『国際開発研究』17(2) :
77-91。

(2009年5月10日 採択決定)